

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

2 各問題の出題意図と解答結果及び出題に対する反響・意見等についての見解

共通テストを導入して2年目となる今年度においては、原則として昨年度の出題を踏襲し、その問題構成についても変更を加えなかった。すなわち、全体は大問7題から構成されており、第1問から第3問で文法及び語彙の基本的な理解を問い、会話文を素材とした第4問、第5問では会話全体の流れ、発話の意図、要点の正確な把握などを多角的に問うことを目指し、読解では第6問、第7問で大意把握や精読など、文章の種類に応じた多様な読みの能力を測ることを意図した。ただし、配点に関しては、読解問題の比重を若干高めて従来の60点から65点に増やし、その変更に応じて発音・文法問題の配点を70点から65点に減らした。会話問題は前年と変わらず、70点のままである。詳細については各問題の報告を参照されたい。

出題に用いたドイツ語の総語数は、共通テスト初年度の前回と比べて、1割程度減った。この点について、日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という。）から、「今年度は意識して語数・語彙数を抑制したものと思われるが、その結果難度が高い語が増えてしまっている」という指摘があった。また、高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からは、「昨年度の共通テストを基準として準備していた受験者は、分量が抑えられ取り組みやすい印象を受けたのではないか」という指摘を頂いた。

使用語彙に関しては、例年同様に、高等学校3年間で学ぶ範囲を中心とし、それを超えると考えられるものには注や平易な言い換えなどを利用し、受験者への過度の負担をできる限り回避するよう配慮した。熟語表現や文法項目についても、高等学校3年間の学習を踏まえて理解できるものを中心とするよう留意した。この点について、教科担当教員からは、「全体的に口語表現が使われたとしても、状況や場面から類推可能であり、語彙や表現に配慮を感じる」という指摘を頂いた。ドイツ語教育部会からは、「全体としてやや難しい語彙が多い印象はあるが、出現回数が1回だけの語が多いなど、解答する上で大きな支障はなかったと願いたい」というコメントを得た。

平均点は124.26点（100点満点換算値：62.13点）で、昨年より119.25点よりも上昇した。前回は旧センター試験から現共通テストにスタイルが変わった初年度であったこともあってか、平均点が下がった。その要因として、総語数が増えたこと、難度が比較的高い語彙や表現の理解を問う問題が含まれていたことなどが挙げられたが、今回は語数や表現の難易度等についての指摘を真摯に受け止め、より適切なレベルとすべく検討した。その結果、平均点に改善が見られたことは大変喜ばしい。

設問構成と出題形式については、「思考力・判断力・表現力等」を含め、ドイツ語を用いたコミュニケーションで問われる多様な能力を測るという目的に沿って検討を重ね決定している。なお、設問のテーマに関して、ドイツ語教育部会から「ドイツでの住まい探しや、大学で開講されている科目（スポーツ）をめぐる会話など、高校生が大学に入り留学等を見据えたときに役立つ、実にリアルなシチュエーションが扱われていることが特徴と言える。これは、学習指導要領にも則した、また時代に沿った出題であり、評価すべき点である」というコメントを頂いた。今後はレベルの更なる適正化を図りたい。

問題構成について、分野別の設問数及び配点は次のとおりである。

発音・文法	第1問～第3問	19問	65点
会話・コミュニケーション	第4問～第5問	14問	70点
読解	第6問～第7問	12問	65点

第1問

第1問は主として単語レベルでの基礎的な発音、文法、語彙の知識を問う問題である。問1～問3は発音に関する問題である。問3は、昨年度同様、選択肢をペアにし、アクセントの位置が比較的単純なドイツ語の特性を踏まえて、問題作成上の工夫を行った。問4、問5は動詞の語形変化の問題である。問6は名詞の複数形の語尾を問う問題とした。問7は、日常的に使用頻度の高い名詞の意味に関する知識を問う問題である。教科担当教員からはおおむね基本的な知見を問うものとして評価された。ドイツ語教育部会からは、「重要な基本事項の理解度を確認するうえで、総じてよく練られた問題である」との評価を得ている。

第2問

第2問は実際にドイツ語を運用する日常的な場面において、文の理解を前提にして個々の文法知識及び使用頻度の高い重要な語彙の知識を問う問題である。文法の知識を正確に運用できるかどうかを識別するため、基本的なものからやや難度が高いものまでを出題し、難易度のバランスを工夫した。教科担当教員からは「広範囲から出題されている。文法事項を着実に、正確に学んだ受験者であれば正答を選ぶことができる出題」とのコメントを得た。ドイツ語教育部会から全般に適切な難度であるという評価を受けた。

第3問

第3問は与えられた語を適切に配置させることで、様々な文法知識や熟語表現を多層的に問う問題である。昨年度と同様に今年度も、6つの選択肢のうち5つのみを用いる形を採用した。昨年度は第3問では5問出題していたが、今年度から1問減り設問数が4となった。共通テストの趣旨に鑑み、ドイツ語運用能力を総合的に問うのが目的であり、教科担当教員からも、受験者が文を構成することにより、表現力を問うことができる設問であるという肯定的な評価を得ている。各問題のテーマは、日常的な話題から選び、基本的な語彙を用いた自然で日常的なドイツ語表現になるように配慮した。ドイツ語教育部会からも「語彙の選択と難度は適切である」と評価されている。

第4問

第4問では、昨年度の共通テストと同様、細切れの設問ではなく一連の会話とすることにより、「日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する」場面設定を行った。ドイツ語教育部会からのご指摘にもあるように、「ドイツでの住まい探し」という留学を見据えた場面設定にすることで、ドイツ語学習に対する受験者のモチベーションを高めることをねらいとした。ただし現在はコロナ禍で容易に海外渡航ができる状況ではないため、「コロナ禍中の受験者心理へ

の配慮を求めたい」というコメントは、今後の問題作成にあたって重く受け止めたい。

問1は会話の内容理解、問2はMikaの発言を総合してMikaの希望を読み取る問題であったが、問2は「下線部㉔の時点で」という出題文に「改善が必要」とのコメントを頂いた。今後は設問の意図がより明確になる表現を心掛けたい。問3は日常会話での決まり文句、問4はMikaが引越しをしたい理由を前半の会話から読み取る問題である。問5は基本的語彙の把握、問6は会話からHassanがコーヒーを飲まない理由を読み取り適切な言い換えを選ぶ問題とした。問7は前半のDianaの発言とMikaの体験を結びつける問題、問8はAlexiたちとの会話からWGの間取りを把握する問題とした。

教科担当教員からは「場面が移り変わるときの状況を説明する言語に日本語とドイツ語の2種類が用いられているが、どちらかへ統一して欲しい」というご意見を頂いた。第4問では前半がDianaとの会話、後半がWGでの会話となっており、この大きな場面転換の状況説明のみ日本語としたが、問いの位置も含め、「読みにくい印象を受けた」とのご指摘があったため、今後の問題作成にあたってはより読みやすくなるよう工夫を加えていきたい。

第5問

第5問は昨年度と同様、スマートフォンの検索画面やメールやチャットといった異なるタイプのテキストから構成された問題である。現代では様々なツールを用いてコミュニケーションが行われるため、様々なテキストの種類に慣れてほしいという意図でこのような出題形式にしている。

問1は会話から発言理由を読み取り適切なドイツ語の言い換えを選ぶ問題、問2は慣用表現の理解を求める問題、問3は時刻表現、問4は会話内容を正確に読み取る問題であった。問4では「arbeitenが日本語のアルバイトと同じ意味となるのかは疑問が残る」というご指摘を頂いたが、arbeitenが「アルバイト」を含まないのではなく、arbeitenが日本語の「アルバイト」より広い意味を持つため、大学生のKathrinが授業後決まった曜日にするarbeitenは文脈上「アルバイト」と訳すことに問題はないと考える。ただし授業で「arbeitenと日本語のアルバイトは違う」と教えることが多いことも事実なので、今後は誤解を与えないような出題の仕方により留意するようにしたい。問5はメールの内容を正確に読み取り適切な言い換えを選ぶ問題、問6は会話や挿入テキスト全体から2人が選んだスポーツ・コースを読み取る問題であった。

ドイツ語教育部会からは、第4問と同様、「リアルなシチュエーションが扱われて」おり、「時代に沿った出題」との評価を頂いた。高校でのドイツ語教育の成果を生かせる設問となるよう今後とも努力したい。

第6問

第6問と第7問が読解問題となっているが、それぞれの設問で用いるテキストを別の文体のもの（今次においては第6問で物語、第7問で学術的な内容の記事）を用いた。これは、CEFR準拠外国語能力試験などで問われる現実のコミュニケーションで必要になる読解力要素を中心に、多角的に受験者のドイツ語力を測ることを目的としている。

まず、第6問については、ヘーベルの『暦物語』をもとに作成したため、受験者によってはこの話を知っているという者もいたようである。問題作成部会としてはそうした可能性もあるとした上で、テキストを読んでしっかり理解できたかを測ることのできる問題作成を心掛けた。

過去形の多用は高等学校での学習と乖離する可能性があるが、物語のテキストにはある程度までは過去形を用いざるを得ない。そうしたことから、過去形を用いるにしてもできるだけ平易なもの（sagte, wollteなど）のみにすることにした。問題文においては難度の高い過去形の使用は避けられたが、設問文においてはやや難度の高いもの（sprang, durchschauteなど）の使用

もあった。次回の問題作成の際にはさらに難度の適正化に努めたい。

問1についてはやや難度の高い問題だという評価を頂いたが、確かにこれはご指摘のとおりである。難度を下げるため、場面の切り替えが明確な内容を挟み、前半3項目、後半3項目と分けたことから、前年度の同形式の問題よりは難度を下げる事ができたと思われる。しかしながら、問1の段階で改めて全体を読み返して考える必要があり、受験者にとっては把握に時間のかかる設問形式かもしれない。この形式の問題を第6問の問1としているのは、テキストの流れを知ったうえで問2以降に取り組んでもらいたいという意図からだが、それが適切かどうかについてもさらに検討を重ねていきたい。

また、選択肢の中に本文で言及されていない内容も含んでいる。しかし、受験者が読み違えてしまうとその選択肢も視野に入ってくる内容という観点から、そうした選択肢を含めている。

第7問

第7問では、それぞれの段落の理解に加え、文章全体の大意を問うことを目指した。また多くの問いを設問及び選択肢の両者をドイツ語にすることで、一つの内容をドイツ語の複数の言い方で理解・表現する能力を測ることも狙っている。

テキストの選定においては、第4～6問とは異なる読解力を測るため、学術的なものを選んだが、受験者になるべく馴染みのあるものと考え、一般によく知られたテーマとした。全体の正答率が6割近くだったことから、本文も設問も高すぎる難易度ではなかったものと思われる。ドイツ語教育部会からも「大学入試問題として適切な難度にまとめられている」というコメントを頂いた。教科担当教員からは「本文と設問を十分に読み込む時間を確保できれば、さほど難しくはない」と評価を受けている。

一方で、本文のどこの部分を問うかのバランスについてのご指摘（問4と問5が同じ段落の理解によるものではないか）や、設問の順番に関してのご指摘（問6は問4の前に置くべきだったのではないか）に関しては、今後の課題として継続的に考察し、より良い問題を作成するために活かしたい。

また日本語で問う問6については、「設問、選択肢ともにドイツ語でもよかったかもしれない」とのご意見を頂いたが、ここでは日本語の設問と選択肢を通して、やや難解な個所の理解を助け、大意の把握の理解の有無を問うことを目指していること、また全体の難度を調節することが意図されているための形式である。

3 ま と め

現行の学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」とされ、当該言語に応じた明確な指導目標が存在しない中、事実上共通テストが高等学校の学習目標となっている点に鑑み、問題作成部会としてはドイツ語学習者の裾野を広げるためにも、問題内容と形式、レベルとバランスに配慮しつつ、良問の作成に向けてさらに努力を続けていく所存である。なお、過去10年間の受験者数・平均点（100点満点換算）の推移は以下のとおりである。

年度	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
受験者数	123	147	135	147	116	109	118	116	109	108
平均点	75.77	77.68	72.39	65.46	64.33	68.42	76.10	73.95	59.62	62.13